

仏教音楽 人物伝

- 7 -

福本 康之

伊藤 完夫 (1906~2005)

Ito Sadao

若き日の経験を生かし宗門に
新たな音楽礼拝を結実させた

音楽礼拝に取り組んだオルガニスト・作曲家

(蓮如上人450回遠忌記念事業として昭和23年に発表)が選ばれました。しかし問題は、音楽面をどうするかでした。仏教讃歌は、すでにそれなりの普及は見せていましたが、儀式の音楽となると少し勝手が異なります。音楽礼拝作曲の上で、大きなハードルになっていたことは、想像に難くありません。

に、若き日にオルガン奏者を志していた彼には、練習のため、当時の日本ではまだまだ数が少なかったパイプオルガンを求め、キリスト教会(東京麹町の独逸教会)に出入りしていた時期がありました。当時を振り返って伊藤は、キリスト教の典礼とその音楽に触れるという、儀式用音楽を書く上で貴重な経験をした、と語っています。

今日の宗門において、『音楽礼拝』はおつとめのひとつとして定着した感があります。その普及は、社会や人々の音楽感覚が明治以降、西洋的なものへと変化するなかで、ある種必然的な流れでありました。

しかし、数ある伝統仏教団のなかでも、特に私たちの宗門で音楽礼拝が隆盛を見せた背景として、忘れてはならないことのひとつに、ある音

楽家の活躍があります。

戦後間もない昭和23年、京都女子専門学校(現・京都女子大学)に、音楽の教員として、オルガニストで作曲家の伊藤完夫が迎えられました。宗門校のひとつである同校は当時、若い学生たちの感性に合ったおつとめが必要だ、との声があがっていました。新たなおつとめのご文には、わかりやすさという点から、制定されて間もない意識聖典

その難問に取り組み解決したのが伊藤です。幸いなこと



自宅音楽室で愛用のオルガンを弾く晩年の伊藤

こうして、試行錯誤の結果生まれたのが、仏教讃歌『さんだんのうた』や『ちかいのうた』などを中心とする音楽礼拝でした。伊藤が作った楽曲は大変好評で、卒業生がそれぞれの寺院や教化団体の活動に取り入れたこともあって、学生のおつとめという枠を超え、宗門全体に浸透していきます。その意味で音楽礼拝は作曲家伊藤の代表作といってもよいでしょう。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長)